

里都まちプロモーションプロジェクト部会
平成29年度第1回会議 議事概要

日時：平成30年1月11日（木）13：30～

場所：中井町役場 3階 3A会議室

【会議次第】

- 1 開会
- 2 あいさつ 太田部会長
- 3 委員紹介
- 4 議事
 - (1) これまでのシティプロモーション事業について
 - (2) 今年度のシティプロモーション事業の推進について
- 5 その他
- 6 閉会

【議事概要】

- 4 議事
 - (1) これまでのシティプロモーション事業について
（事務局より、【資料1】中井町シティプロモーション事業 及び【資料2】平成29年度 美・緑なかいフェスティバル 啓発ブースアンケート結果 により説明）
 - 部会長 本議事について、質問等はあるか。
 - 委員 男女を分けた狙いとは何か。
 - 事務局 28年度はシールを貼るアンケートを実施し、4色を使って町内・町外・男・女に属性を分けた。29年度は紙に書いてもらう形式に変更したが、昨年度を踏襲し、同様の属性分けで実施した。記入式にしたことから、住まい・職業など簡単な属性も追加している。属性については、町内外と男女では感覚が違うのではと考え、分けている。
 - 河井教授 これからターゲットングしていく中で、女性と男性で大きな差があり、一方で女性の推奨意欲が高く、一方で男性が低いという場合であれば、男性を中心にして動かしていく、逆に女性の方が高いからこそ、それを持って引っ張り上げていくという発想は可能だと思う。それほど差がなければ、男性、女性にこだわらなくてもいいのかもしれない。そういう知見になる。そういう意味では男女を分けたことは無意味ではない。
 - 委員 否定しているわけではなく、男性でアンケートに答えてくれる人はそれだけ積極性があるのかと思い、質問した。
 - 河井教授 男性の積極性が高く、女性がそうではないということであれば、意外と他の地域に比べ特徴的となる。むしろ女性の方が積極的に語る場所が多いので、そうである

ならば、女性があまり魅力を感じていない可能性があるを読み取ることもできる。単なるアンケートではなく、女性の関わられている方や関わっていない方に、インタビューをして深掘り調査を行い、なぜそうなるかを検討することで、次の一手を打つためのきっかけとしては意味がある。

委員 美・緑なかいフェスティバルで行われているが、誰でも参加はできるイベントではあるものの、限られた人のアンケートになっている可能性がある。ここだけでなく、広範囲で情報を集めた方が良いのではないか。

事務局 何も無いところからいきなりアンケートというのは難しいと思う。イベント等に出店して中井町を PR していくことを考えているので、そういった機会にアンケートを取らせてもらい、検討材料にしたい。

事務局 同じ美・緑なかいフェスティバルで調査しているが、28年度は中央公園、今年度は雨天のため建物内の会場で行っており、対象者は多少違っている。これらは継続してやっていくことが大事だと考えている。

河井教授 こうしたアンケートをシティプロモーション事業の成果と指標として測るならば、200人のモニターを用意して、毎月3問だけ聞くというやり方もある。その人たちの中で、だんだん意欲が高まってくるはずである。選ばれているということは、もともと他の人より意欲は高まりやすくなるが、それが形として分かれば、やっていることに自信が持てる。今回のアンケート結果だと、頑張ったが意味がなかったという様に見える。積極的に町に関わる人や推奨してくれる人を増やしていくのであれば、取組みの前後でアンケートを取り、数字が上がるのか上がらないのか、町民全員に聞く必要はないが、アンケートを成果指標として使うのであればそういった発想も必要であり、今後作る指針にも位置づけた方がよいと考えている。

部会長 他に意見はあるか。なければ、議事(1)はここまでとする。

(2) 今年度のシティプロモーション事業の推進について

(事務局より、【資料3】今年度のシティプロモーション事業について 及び【資料4】シティプロモーションワーキンググループの実施について により説明)

部会長 戦略指針は、今年度中にまとめる予定か。

事務局 今年度中に策定する。次回の部会でも状況報告する。

河井教授 戦略指針について、ターゲットを決めてからブランドを明文化するのでは、逆ではないか。町がどんな特徴を持っていて、どんな人に刺さるのかを考え、町にじっくりくる人たちは誰なのかを明らかにし、じっくりくる人たちの中で、町が特に狙いたい人に対して、例えば、町の暮らしが見えてくるようなストーリーを明確にしたブランド本やブランドツアーを提供する。町にじっくりくる人にブランド本を渡し、一度来てみたいと思ってもらえるようにしないと、メッセージだけあっても伝わらない。町から PR するだけでなく、参加してもらうことが必要なのであれば、イベントでも SNS でもよいが、そういったシティプロモーション用のメディアをどうするのか、ということ議論していかなければいけない。また、テーマソングを作っ

ただけでは意味がなく、テーマソングを使ってダンスや小さなミュージカル、写真コンクールをしてみましょう、と展開されれば活きるが、保留音で流しているだけでこの町に住みたいとは思わない。ただ、気にはなるかもしれないので、そこで町民がダンスコンテストを開催して、その結果をユーチューブに載せて、見てもらう等の展開が必要となってくる。町に来ないと参加できない写真コンクール等を開いて、町民以外からも積極的に参加してもらい、ブランドメッセージを作ったのであれば、ハッシュタグにして、インスタグラムで利用する等の展開もある。シティプロモーションだけでは人口は増えないので、どう町に関わってもらったら成功なのか、中井町の指針を作る必要がある。

部会長 何が誇れるものか、ということワーキンググループで洗い出しているところか。
河井教授 進捗を聞いている限りだと、ワーキンググループを利用してブランドメッセージ案ができてくるので、今度はそれを利用して、沢山の人に選んでもらう仕掛けが必要となってくる。急ぎすぎている気がするので、3月までには、何をするのか、どうやって決定するか、までを決めればよいと思う。伊勢原市はそういった作り方をしたので、実際のブランドメッセージの作成は来年度でもよい。このスケジュールで町民を巻き込めるのか。デザイナーと役場だけで決めても、住民としてはよく分からない言葉が降ってきた、ということになりがちである。町民の気持ちを盛り上げて、醸成する期間がないと、町外に伝えて実際に来てくれても、町民に聞いたら「知らない」となってしまうのは美しくないのではないか。メッセージ作成の方向性を町が決めるのはよいと思うが、メッセージまで決めて指針を作るのは、意味合いとしては違ってくると思う。

部会長 指針策定のスケジュールについて、事務局はどう考えているか。
事務局 今いただいたアドバイスもあるので、指針の書き方については再度検討する。
委員 ワーキンググループにも参加しているが、共通意識が高まっていると感じた。ただ、ワーキンググループの外に広がっていくのか、他の町民とも認識があっているのか、というのは疑問が残る。この人たちを活かす場所が必要ではないかと考えている。スペース的な意味合いもそうだが、この人たちで何かを作り上げてみよう、という試みもあってよいのではないか。学生も参加しているが、よく勉強していて、我々の知らない中井町もある。我々が知らない部分との関連で、横断幕が掲出されたものの、ホテルに興味を持ってもらっても、町民が案内できないと取り込めないということもあるので、教育のようなものも考えていく必要がある。

河井教授 生駒市に「いこまち宣伝部」というものがあるが、やる気のある方々が情報発信の仕方を勉強して公式フェイスブックを運用している。参考にしてはどうか。

部会長 指針策定にあたって、ワーキンググループの活用は決まっているか。
事務局 今のところ今回の指針は資料の内容のとおり進めているところなので、何かの形でご協力いただければと考えている。

部会長 他に意見はあるか。ないようなので、議事(2)はここまでとする。
本日の議題は全て終了した。

5 その他

(事務局より WG 開催を案内)

部会長 全体をとおして何かご意見あるか。

委員 中井町の人口は減少傾向だが、世帯数は若干増えている。単純に考えると、一世帯あたりの人数が少なくなっているということになる。中井町の知り合いから、子どもの成長に関して近所の人みんなが関わってくれるので助かっているという話を聞いた。今ある良いところだと思うが、どうしたらそれを PR できるか考えている。ひとつに、PR は中身とタイミングが大事だと思うが、例えば、国が行う 5 歳児の保育料無償化のタイミングで、中井町は 3～5 歳児の保育料を無償化する、ということがもしできれば、子育てをするなら中井町はいい、となる。自治体同士を比較するときには町が選ばれるひとつの要因になるのではないか。最終的に無償化されるのであれば、中井町が先手を打ってしまう、というのもひとつの手だと思う。

部会長 人口が減り世帯数が増えているとのことだが、世帯が分離しているということか。
事務局 世帯が分離するという場合もあるとは思うが、アパート暮らしや施設入居者も 1 世帯扱いとなる。

委員 就職、進学を機に町外へ出てしまう若者は多いのか。

事務局 仕事の形態も昔と比べ変化している。勤務先の関係で町を出ていく方もある程度の数がいると思う。

委員 町外に出た人が、戻ってくるタイミングというのもあると思うが、いかがか。

事務局 小学校へ上がる時期に戻ってくる人が多いと感じる。

委員 結婚をして町外に出て、子どもが生まれたときに、毎年イベントなどのきっかけがあると祖父母の家に行く癖がついて、子どもも楽しみになるのではないか。それなら中井町に戻ろう、という話にもなり得る。そういったタイミングがあるとよい。

事務局 中井町に来ていただく場づくりというのも大切だと思う。町外に出て結婚された方で貸家住まいをされている方が、町内に戻ってもらえるとよいと考えているので、町でもそういった対策を来年度以降に考えている。そういったことも含めてプロモーションを行っていきたい。

部会長 他にいかがか。

それでは、本日の議事は全て終了する。

○出席委員：

湘南ケーブルネットワーク（株）専務取締役営業本部長 太田 努

神奈川県西地域県政総合センター企画調整課主査 川東 充孝

（株）タウンニュース 湘南支社大磯・二宮・中井編集室 豊田 博美

星槎学園運営委員会 委員長 増田 明雄

子育て支援センター 曾我 雅代

町民代表 小宮 邦俊

町民代表 野本 英里

町民代表 小林 浩

○アドバイザー：

東海大学広報メディア学科教授 河井 孝仁

○事務局：

中井町 3名